

栗ヶ沢バプテスト教会 25-12-28 主日礼拝説教  
「幼子イエスはガリラヤへ」マタイ 2：19-23 木村一充牧師

2025年最後の日曜日を迎えました。先週は、日曜日のクリスマス礼拝、水曜日のイブ礼拝の二つの礼拝をささげました。<sup>あいにく</sup>生憎、いずれの日も雨模様の天気でしたが、多くの方々とご一緒に神のみ子のご誕生をお祝いすることができたことを感謝しております。しかも、二つの礼拝ともに、初めて当教会の礼拝にお見えになった方（新来者）が出席してくださったことも、嬉しい出来事でした。

そのクリスマス礼拝の次の日曜日である今日、礼拝でお読みいただいた聖書の箇所はマタイによる福音書2章19節以下であります。ここには、クリスマスのその後の出来事が書き記されています。2章の始めには、東方の博士たちが星をたよりに、はるばるユダヤの地まで旅してきたことが書かれていました。彼らはヘロデ王と面会し、キリストがどこでお生まれになったかを尋ねます。ヘロデは、学者たちに調べさせ、それはユダのベツレヘムであることを伝え、「行ってその子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言います。しかし、それはヘロデ王の本心を表す言葉ではありません。ベツレヘムに生まれた幼子を王として拝む気持ちなど、さらならありませんでした。それどころか、彼はこの赤子を殺してしまおうと思ったのです。自分の地位を脅かすユダヤ人の王が新たに生まれることなど、到底受け入れられなかったのです。博士たちはキリストが生まれた場所を見つけ、そこで、幼子イエスと出会い、宝の箱を開けて高価な贈り物をささげて救い主をひれ伏して拝みました。ところが、その礼拝のあと、博士たちは夢で「ヘロデのところに帰るな」とのお告げを聞きます。そこで、彼らは来た時とは別の道を通って自分たちの国へ帰っていきました。ヘロデのたくらみは実現しました。幼子は、神の守りのもとでその命を保ったのです。この博士たちのキリスト礼拝に続けて、福音書記者マタイは、2章13節以下の段落で、およそクリスマスに似つかわしくない痛ましい事件が起きたことを書き綴ります。それはヘロデ王によるベツレヘムの嬰児虐殺という事件です。新約聖書のなかで最も残虐な事件ともいえるこの出来事が、クリスマスのあとに起きたことに対して、多くの説教者はこの部分を避けて通りたい、この部分は読み飛ばしたいと思うのではないでしょうか。しかし、この部分を読み飛ばすことはできません。この出来事を厳しく見つめなければなりません。なぜマタイは、このような暗い事件をその福音書に書き綴ったのか。それは、クリスマスの出来事を前にして、救い主の誕生の知らせを嫌悪し、その生まれたばかりの赤子を抹殺しようとする惡の力がこの世に働いていることを私たちに伝えるためです。それを見失ってはならないとマタイはいいます。

もちろん、こうして礼拝に集い、キリストのご誕生を先週お祝いしたばかりの私たちの誰も、イエスを殺してしまおうなどとは思っていないことでしょう。イエスに対する敵意や嫌悪を抱くことさえありっこないと思っています。しかし、本当にそうでしょうか。1年を通して、いつどこでも「主イエスよ、いつどこでも私の心にお入りください。そして、どうぞお言葉を語ってください。私は決してそれに耳をふさぎ、あるいはそれを妨げたりはしません」と言える生活だったでしょうか。教会の歴史は、むしろキリストを無きものとしようとする私どもの罪と、それを悔い改めるように導く神の呼びかけとの戦いの歴史であったとさえ、私には思われます。それは、初代教会の時代に異邦人伝道の道を選び、小アジアやギリシャで開拓伝道によって教会を立てていったパウロの手紙を読んでも分かります。たとえば、コリントの信徒への手紙一、4章8節を読むと、次のような言葉があります。「あなたがたはすでに満足し、すでに大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。いや、実際王様になっていてくれたらと思います。そうしたら、わたしたちもあなたがたと一緒に王様になれたはずですから」コリントの人たちは、パウロたちを抜きにして王様になっていました。それは十字架の言葉を無視して、彼らがおごり高ぶり、自分を誇るということをしていたことを意味します。神の思いを無視して王様になれるのなら、そんな簡単な話はないと言えて、パウロはコリントの誤った発言をする信徒たちを諫めるのです。ヘロデは、生まれたばかりのキリストを殺そうとたくらみました。しかし、キリストを王位から引きずり下ろそうとした点では、ヘロデもコリント教会の信徒たちも変わりはありません。同じです。クリスマスの礼拝を先週ささげたこの朝、私たちの心の中にキリストに代わって自分が王となろうとする思いがないでしょうか。嬰児虐殺の事件を綴るマタイの心中を想像しながら、そう思われるのです。

ただ、この事件をめぐって二つのことを申し上げなければなりません。第一は、いったい何人の赤子が殺されたのかという点です。ベツレヘムは小さい町で、周辺の地域を入れても、人口は500～1000人でした。その中に赤子、しかも男の子が何人いたでしょうか。せいぜい20人くらいだったと思われます。何百人も殺されたのではありません。第二の点は、この嬰児虐殺事件は、マタイ福音書以外の書物に公には記録されていないことです。ユダヤ人歴史家ヨセフという人の本にも、この事件に関する言及はありませんこの時代に、ローマ帝国の支配下

にあったパレスチナでは国中いたるところで争いがあり、殺害が行われていました。たとえこれが事実であったとしても、そのことは「ニュースにもならないほど小さな事」としてユダヤ人たちに受け止められていたのかもしれません。このヘロデのたくらみを、ヨセフは博士たちが帰ったその夜、夢で天使から聞いていました。ヨセフは夜のうちにエジプトに向けて出発します。なぜ、エジプトに向かったのか。実はこの当時、ユダヤ人が一番多く住んでいた地域はエジプトだったのです。エジプトにはナイル川があり、その下流は肥沃なデルタ地帯です。多くの民を養うことができる穀物の収穫が可能でした。たとえば、アレクサンドリアというエジプトの町には100万人近いユダヤ人が住んでいて、そこにはユダヤ人居住区もありました。松戸市の人口の倍くらいのユダヤ人が、すでにエジプトに住んでいたのです。避難するには格好の場所でした。そうして、ヘロデは死ぬのです。

ヘロデ王が死ぬと、ヨセフはマリアと幼子をつれて、ユダヤの地に戻ろうとします。しかし、ヘロデ王の息子のアルケラオが、父の後を継いでユダヤを支配していると聞いて、ベツレヘムに戻ることを断念します。アルケラオは父親に輪をかけて残虐な王として知られていたからです。そこで、一家はガリラヤのナザレに移り住みました。ガリラヤという地名はヘブル語の「ガリール」から来ています。「輪」という意味で、「周辺」とか「地域」を意味するようになりました。要するに、エルサレムから見れば「辺境」の地がありました。イザヤ書8章には「異邦人のガリラヤ」という言葉があります。イエスが誕生したころ、ガリラヤにはユダヤ人だけでなくギリシャ人、カナン人などの異邦人が数多く住んでいました。ユダヤ人の人口比率は50%程度だったとみられています。そのような辺境の地に、ヨセフとその家族は移り住み、そこで暮らしました。ナザレという村は、ガリラヤ湖の南西およそ20キロほどに位置する村です。しかも、ナザレは旧約聖書に一度もその名前が登場しない村です。2012年にイスラエルを旅行した時、ナザレの町を訪問しました。その時、丘の上の道を歩きながら町全体を見渡すと、周辺に建物がいっぱい立っていて村というより、むしろ都会だなと感じて驚かされたのを覚えています。W・バークレーという人の注解書を読むと、ナザレは決して人里離れた寂しい村ではなかったと書いています。むしろ、シリアからエジプトへつながる幹線道路（＝「海の道」とよばれる）に面する交通の要衝で、多種多様な旅人がこの村を往来し、外国人と日常的に接する生活をする中で、自分が伝えるべき神の言葉を温めていったのだろうとバークレーは言います。

イエスは、このナザレで30年間暮らしました。ヨセフとマリアというよき両親のもと、よい家庭環境の中で少年時代、青年時代を過ごしたのです。次に、イエスは長男としての務めを果しながら成長しました。ヨセフは、子どもたちが成長する前に、若くして亡くなつたとみられます。ガリラヤのカナで婚礼があったとき、通常は家族総出でお祝いに出かけるのですが、そこにはマリアしか登場していません。イエスは一家の柱として、母マリアと年下の兄弟を支えながら大工として働きました。イエスは、家庭のなかの小さな務めを不平も言わずに果しながら、弟や妹の面倒をみたものと思われます。そして、第三にこの世で働くことが何であるかを30年間の間に学ばれました。おそらく、その生活は決して贅沢でなく、節約して食べるものの、着るものを見たことでしょう。大工の仕事ではさまざまなトラブルを経験したことであろうと思います。個人的なことですが、私の兄は建築士であり、長く建築現場の施工管理の仕事をしてきました。30代で独立して、地元で仕事を始めましたが、たまに香川に帰ると、仕事上のトラブルが発生し、忙しく対応している処をみたことがあります。イエスも同じような経験をされたに違いありません。そのように、普通の人としての生活を30年され、救いの言葉を語る前に人の生活がどのようなものであるかを経験されました。以上のことを通して思われる事、それは預言者がどこに住み、どのような生活をしてきたかということは、とても大事であるということです。

クリスマスイブの礼拝でも申しましたが、私は神の言葉を取り次ぐ者が、どこでどのように住むかということがとても重要なことだと思うようになりました。言葉は肉となって、私たちの間にテントを張った、というのがヨハネ福音書のみ言葉でした。私自身も、教会が立っているこの松戸の町をもっと深く知り、もっと慣れ親しんで、この町に根差す教会になることが大事なことだと思われています。11月下旬から12月にかけて、教会堂の利用を二組の地元の方が申請されました。その二組の方から、嬉しい言葉を聞きました。11月にクラリネットを演奏された若い女性は「こうして、こちらの教会で楽器を演奏して、皆さんに聞いていただけて、とても幸せです」と言われました。また、一昨日の音楽教室の先生は「教室の生徒たちが、これまで習ったことを12月にこの教会で発表できるのを楽しみにしているんですよ」と言われました。このような教会堂が与えられている私たちは本当に幸いです。このアドバンテージを活かさなければ、神さまに申し訳ないというべきです。イエスはナザレに住まわれ、ナザレの町を愛して、公生涯までの日を過ごされました。私たちも、この松戸の町、東葛地域の町を愛して、キリストの福音を語る者でありたいと思われるのです。

お祈りいたします。